

下里豪志さんピアノ(Vol.3) たーけーダイアリー



「イタリア留学へのきっかけ」



2015年夏。

イモラ国際ピアノオーディション「JDAZ」というコンクールが東京で行われました。全国各地での予選に合格すると九段下にあるイタリア文化会館で本選会があります。

そのオーディションではそれぞれの部門で第1位、そして全部門から数名だけ特別賞が設けられ、その特別賞の副賞で、夏の2週間行われる、「イモラサマーアカデミー」という講習会への渡航費など免除の切符が頂けるのです。

そこで私はありがたいことにそのチャンスを得た、パスポートを更新していざイタリアへ。

サマーアカデミー期間中は(後に留学先となる)イモラ国際ピアノアカデミーの先生方の中から3名の個人レッスンを受け、自分の時間以外は聴講をしたり、練習をしたり、観光をしたり。

日が暮れたら毎晩行われるコンサートに出かけたり、出演したり、世界各国のピアニストを志す仲間たちがイモラの街を行き交う賑やかなものとなります。

その中で私が楽しみにしていた先生がレオニード・マルガリウス先生。先生は若い頃にピアニストを引退して、指導の道に専念すると決断した珍しい方で、来

日回数の少なさから日本ではそこまで知られていませんでした。

ですが、私が恋焦がれる世界的若手ピアニストたちがこぞって先生の弟子だったのです！

そこで私は彼らがコンクールで弾いていた曲を練習して、先生のレッスンには自分の十八番ではなくその曲を持って行きました。

先生がいっしょやる前に練習していたら「続けて」と言われ、25分間最後まで弾き切りました。すると先生が「ショパンの練習曲を弾いてみろ」「リストの練習曲を」「ラフマニノフの練習曲を」と立て続けに指示し、それに思い出しながら弾いて応えていたら……

「僕と勉強しないか」と一言。

そして受験の話をするから他の生徒たちは出てくれと聴講生たちはランチに誘導され、先生と通訳さんと私だけに。

まさかこの誰かもわからない私に先生から誘っていただけだと思う……

これが私がイタリア留学へと導かれた最初のエピソードです。

本当人生って何があるか本当にわかりませんね。

文化の泉 宝物

No.79

問

文化センター

☎8899-7399

ウークイあれこれ

台湾南部のある村を訪れたときのこと。夕暮れどきに、いきなりバババツと爆音が鳴り始めました。何事かと外に出てみると、近くの道路で大量の爆竹が鳴らされていました。台湾では、沖縄の旧盆ウークイにあたる旧暦7月15日の中元節や、旧暦8月15日の中秋節に爆竹を鳴らす慣習があるようです。また、台湾にはお金を模した紙を燃やして祖先に送る慣習もあり、最近ではスマホやパソコンを模したものなども売られているようです。あの世でも電子決済が普及しているのでしょうか？ 沖縄のウチカビよりも現代化(?)していますね。

なので、演者はとても大変なのだから。また、沖縄では旧盆中は海には行くなというのが一般的です。しかし、辺戸岬のすぐ北にある与論島ではその真逆。男性が海に入り、魚をとってきて供えます。昔、おばあさんから、魚がとれなければ石でもいいからと叱られたという逸話を聞き、沖縄出身の私は隣の島でもこんなにも違うのかと驚きました。

爆竹といえば、南風原町の隣、八重瀬町の東風平や南城市の大城などでも旧盆のウークイの夜に爆竹を鳴らして祖先を送ります。一方、南城市の目取真ではウークイのあと、夜中に綱引きをして、火を灯したトゥール(旗頭)を一晩中立てておきます。近年ではトゥールの明かりを電球に変える地域が多いなか、夜空にトゥールの火がちらちらと浮かぶように並ぶ光景はとても幻想的です。

ウークイであの世に帰れなかった無縁仏を芸能でもてなし送るヌーパレーという行事をする地域もありま

す。なかでも南城市の知名の胡蝶の舞が有名です。南風原町字本部のハーベルモーイとは少し異なり、蝶役の青年たちが飛びはねて踊る芸能です。スクワットの連続のような演舞

地域によって様々なウークイの行事。しかし、祖先をもてなし丁重に送る気持ちには同じなのかもしれません。



ウークイでパイナップルを転がす